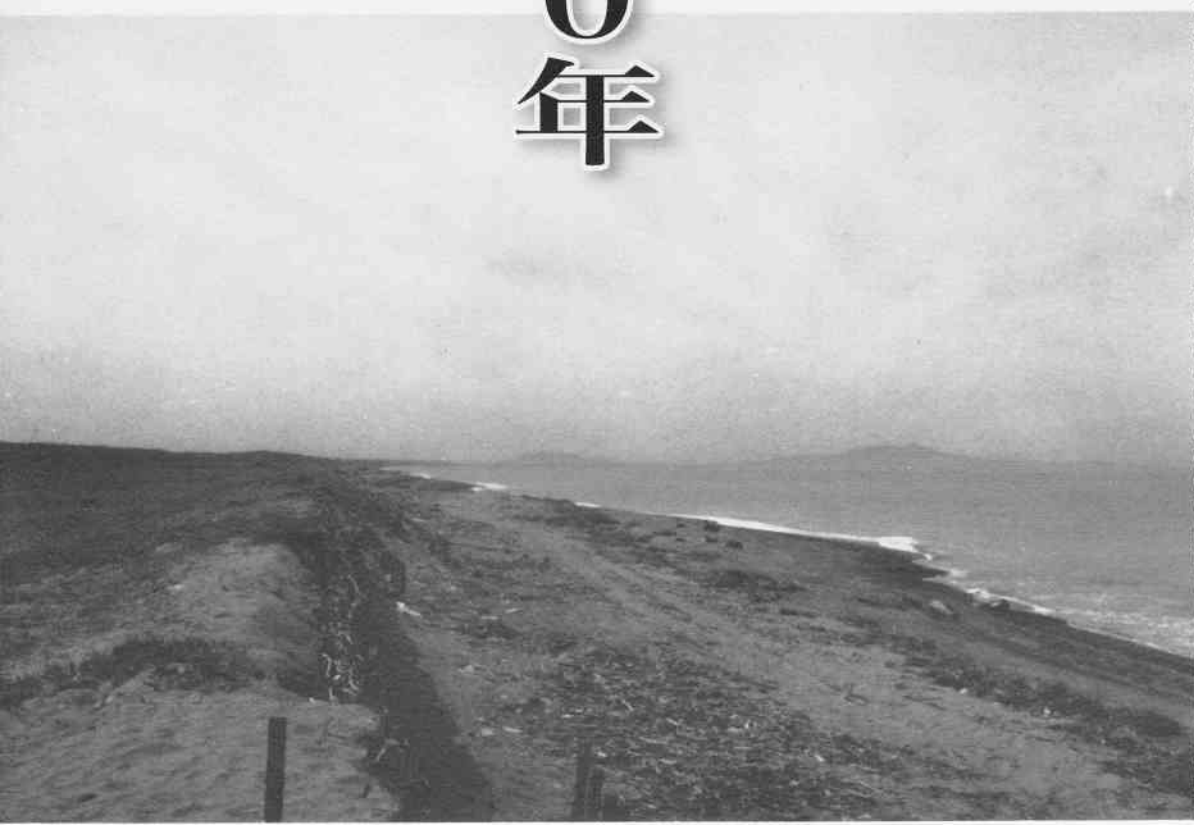


私のふるさと学習

浅野ミヤ

能代砂防林の300年



—私のふるさと学習—

能代砂防林の300年





目

次



はじめに 4

1700年頃の能代(野代) 5

14丈のなぞ 7

1800年頃の松原の広がり 9

1、「能代木山方備図面」

2、今もあざやかな真澄の絵

3、栗田定之丞の登場

4、賀籐景林父子の頃

明治、大正期(1868年〜1925年) 13

1、官林(国有林)だけが残った

2、下浜に育った父の記憶

3、能代の浜はなぜ荒れた？

近代の植林の始まり 17

1、富樫兼治郎さんの活躍

2、大事業を支えた人たち

埋めわら工の順序



② 植え穴を掘る



① 苗の根を消毒する

戦時中の砂防林（1941年～1945年）……………22

- 1、戦時中も植林はあった
- 2、地元の人しか知らない山火事
- 3、枯れ松ばかりでなかった「松根油」作り

戦後の復旧にも困難が……………26

- 1、くり返された復旧工事
- 2、自然のきびしさの中で、張り切って働いた日々
- 3、林の中にも近代化の波が
- 4、親から子へ伝えるべき大切なもの

植林が終わってから……………31

- 1、砂防林切る、切らぬ
 - 2、能代市による整備進む
 - 3、日本海中部大地震発生
 - 4、松くい虫被害北上
 - 5、最近の変化
- 『心』を伝える

あとがき……………36



③わらを埋める



④苗（左手）を植える

はじめに

1月半ば過ぎ平成22年度の小学生の「ふるさと学習交流会」というのがあった。能代市の小学生が、ふるさとの伝統芸能や自然環境等を学び、発表する場である。一般の大人も参加してよいというので行ってみた。

子どもたちが、少し緊張しながらも生き生きと、踊ったり、発表したりしていた。55年も前に小学校を卒業した私たちの時代には、こういう学びはなかったように思う。子どもの頃からこうして身近な文化を学ぶことはとても大切で、意識して学ぶ場を作らないと伝わっていかないのだと思う。

私の20年に近い「風の松原」の学びも、一時中断していたのだが、子どもたちの「ふるさと学習」と全く同じなのだから、私なりにできる範囲でやればいいのだと思い直すことで再開することができた。今年だからこそ、「風の松原の300年」をまとめたい、何よりも松原を残してくれた越後屋、越前屋両家をはじめとする幾万の人たちへの感謝の気持ちを一市民として伝えたいと思っていたのだ。古文書は全く読めず、資料も理解できないものもあったりで、基礎知識の無さを嘆き、物忘れに悩まされながらの作業であった。

また、「風の松原」全体となるとあまりにも範囲が広く、手に負えないので後谷地国有林中心のまとめとすることにした。

今年は1711年（正徳元）、能代の有力な問屋6代目越後屋（渡辺）太郎右衛門が、クロマツ植林につながる砂留めを命じられてから、ちょうど300年目にあたる。能代の砂防林の歴史を振り返るのにふさわしい年。この300年の間に能代の砂防林がどのように変化してきたのかを今一度確認し、植林に関わった人たちに思いをはせることが、これからの保全を考える上での基盤になるのではとも思う。

1700年頃の能代（野代）

能代の町づくりは1500年代半ば頃より始まったとされている。それからほぼ150年たって、民間による砂留め工事の始まる頃の能代はどんな状態だったのだろうか。

1694年の元禄大地震、1704年の宝永大地震と続いて大きな被害を受け、「野代」から「能代」へと改称された頃であった。

一方、毎年秋から翌春にかけての砂飛びが、年ごとに激しくなり、その被害は清助町、旧鍛冶町、柳町、畠町方面まで及んでいた。清助町、鍛冶町では砂に埋まり潰れてしまう家もあった。

1700年代に入ってから秋田藩による砂留め工事も行われたのだが失敗している。街の発展のためにはどうしてもこの砂飛びを抑え、農地や住宅地を増やすことが迫られていたのだ。

砂留め工事は生半可な覚悟でできることではない。材料代、人夫賃といった多額の直接経費

ばかりでなく、土木建築の技術、植生、風、砂等に対する知識が要求され、また長い年月がかかることを覚悟しなければならぬ。そしてまた必ず成功するという保証もない。6代目越後屋（渡辺）太郎右衛門、4代目越前屋（村井）久右衛門両人の決意はいかばかりであったか。深く敬意を表するばかりである。

私は初め両人の分担した地域



「風の松原」全体図（「風の松原に守られる人々の会」作成リーフレットより）

をはつきり分け、それぞれの工法を図解したいと考えた。区域はおおよそ分かっているし、砂留め工法の数字も載っていたからだ。

②は越前屋久右衛門担当の「鍛冶町、新町、出戸町砂留」（盤若野砂留）。ここは昔、盤若山野と呼ばれた地域ではないかと調べてみたが、範囲がはつきりしなかった。今の盤若町、西通町、末広町、景林町辺りと思われる。新町は今、大手町となったがこも一部入っていたのだろう。この区域は「盤若町辺りは正徳3年（1713）から享保年中（1734年頃）まで自費で」と、「享保9年（1724）から始まった」との記録があるが、3町が引き継ぐことになっていた。後に能代奉行所の役人である白坂新九郎、鈴木助七郎に引き継がれていった場所を含んでいる。

③は越後屋太郎右衛門、越前屋久右衛門兩人で費用を折半した「後谷地砂留」で、1712年（正徳2）に願い出、翌1713年（正徳3）より始まっている。当時は住宅地より南方一帯は後谷地と呼ばれた広大な未開の地であった。兩人の受け持ち場は東西450間、南北510間、およそ75畝（町歩。1間を1・8畝で計算）に及んだ。南限は旧大内田村境、東は今の中和通り辺り、西は海岸まで、となっているが、範囲が広すぎ単純な計算で含まれていたのか、よく分からない。



14丈のなぞ

古文書による「清助町後砂留」と「後谷地砂留」の工法は、ほぼ同じになっている。「長さ14丈の丸太柱を建て、簀垣等を設けるが、飛砂激しく砂に埋まって役に立たないので、材木で所々に垣を作り、町中からごみを集めて垣の間に入れ、その上にさらに二重三重に垣を立てた。その年によつては1年に4、5度も簀立てをし、ようやく砂が留まるようになり、草の種を蒔いた。数年で自然に草が根付くようになり、茱萸や柳を植え大方青山となった―」

「鍛冶町、新町、出戸町砂留」（盤若野砂留）では「長さ100間、高さ5尺の土手を、《すからみ》という方法で造り、砂が留まってから西と東にそれぞれ100間の簀垣を造る」

これらを寸法に従い略図を書いてみたが、しよせん素人、人前に出せるようなものにはならない。何より14丈（約42尺）が気になって仕方ない。14尺（4・2尺）の間違いでないかと原本のコピーを見せてもらったが、やっぱり『拾四丈』であった。思いあまつて歴史研究家に尋ねると「以前その14丈が話題になったことがあった。一度記録されたものがそのまま写されていったのでないか」という見解であった。

土木建築に詳しい長兄には前から図にしてほしいと、一式コピーして届けてあった。なかなかやってくれないので催促したら、「42尺もの柱はこの辺で簡単に準備できるものでない。一般の土木工事に使うことはありえない。仮に14尺（4・2尺）の間違いであったとしても大量に打ち込める材料ではない。何かの間違いでないか。もっと当時の寸法を調べた方がいい」と返されてしまった。

◀「天保七年、越後屋太郎右衛門上書」

後谷地砂留の情状は後述の如くありし事
番匠義一丹保書す

○三張紙の白紙に所収
城居和を分る限沙面
一昨書裁し事

ちち場又新和
拾四丈ヶ丸を柱と

上書の中に「拾四丈」と記されている

今使っている尺貫法が通用しないのか。そうすると資料に出てくる他の数字もすべて？になって力が抜けるようであった。ものごとをオーバーに表す習慣、例えば盆踊りの金一封「一千円」が読み上げられる時は「二、金一万円なり」に化ける世界なのだろうか。「白髪三千丈」という表現もある。当時の人には常識で通用することでも、時代が変われば？になる。ちなみに能代公園わきの「越後屋太郎右衛門の松」は高さが20メートルになっている。あの松の2倍もの柱というのは、やはり考えにくい。

出ばなをくじかれたようでガックリ、しばらくは続ける気が起きなかった。

14丈のナゾは今すぐには解明できないけれども、いつかは納得のいくものになりたいと思っている。そして自己流の図を書いていくうちに、これって私が今までいっぱい見てきた近代の砂丘造りとほぼ同じでないか、ならばその写真をここに持ってきて後は想像してもらえばいいのでないか、と思い付いた。



▲ヨシ^す簀で作る^{たいさがき}堆砂垣。写真は近代のもの。1700年代「砂留」が始まった頃は、垣と垣の間にごみを入れ、さらにその上に簀立てを繰り返した



◀芝を絡ませた堆砂垣。この工法は今でも当地方で「すがらみ」と呼ばれている。数年たつて砂草（ハマニシク等）が育ってきた

1800年頃の松原の広がり

1、「能代木山方備図面」

砂留め開始から約100年後、松植林はどれくらい進んでいたのだろうか。

1800年頃作成といわれる「能代木山方備図面」の原本は見たことはないが、「写し」のコピーが数種類手元にある。それぞれ少しずつ違っているのは、写した人の目的により省略されたり加筆されたらしい。これらの「写し」を総合してみると、100年の間に後谷地と呼ばれていた広大なあちこちで植林が行われており、畑地が増えていたことが分かる。

例えば大森山より西の馬道に沿って、大森山の東側、男鹿街道に沿って今の景林町・松美町・昭南町の一部、花園町辺り、追分町、通町、住吉町、と植林の規模ははっきりしないが、広い範囲にわたっている。村井久右衛門の名も見えるが、随所に「木山方植立松」と書かれているものもあり、この年代には能代奉行所から独立し本庁管轄となった「能代木山方」が松植林に大きく関わっていたものと見受けられる。

2、今もあざやかな真澄の絵

1800年頃といえば、有名な旅行家、菅江真澄が1806年能代を基点に近辺を歩き、数々の絵や紀行文を残している。「能代市史・特別編・自然」にも「能代の浦」「住吉の松原」「萩野の沼」「鹿の城」「能代の湊」等が掲載されており、当時の能代の様子が描かれ、絵・文、共に興味深い。絵は必ずしも実際の光景と同じでない、描く人の興味にしたがって強調される部分が違ってくる、と言われる。それにしてもこれらの絵文は当時の風景を彷彿^{ほうふつ}とさせ、見飽きることがない。私は

これらの絵を見ると、どこから見て描いたのだろうと、現地に立ってみたくなる。

「萩野の沼」はこれまでずっと元出戸沼のことだろうと思ひ込んでいた。「能代市史」の解説を見てそうではなさそうと知り、ならばどこにあったのだろうと不思議だった。じつと絵を見ていると右（西方）に大森の社、正面上部（南方）に出戸山神社らしき標、手前の松並木は男鹿街道でなかろうか。とすれば現能代公園よりもっと南の高台で、男鹿街道が足元にみえる所、ひよつとして私の生まれた旧本町にあった「山っこ」でないだろうか、などと勝手に想像してみる。地図上に立ってみるとそれは可能であった。

真澄の絵にあるピーナツ型の沼は、日本海中部地震の際、液状化現象の起きた形によく似ている。1800年頃は出戸沼および周りの湿地は、近代になって埋め立てた頃よりずっと広がったのでないだろうか。これも「能代市史・自然」を参考にしての推測である。

いずれにせよ菅江真澄が当時の能代の様子を丁寧に描いてくれたおかげで、植林がどのくらい進んでいたかも、想像できるのだ。

「能代の浦」には植林前の一面の砂山が連なっており、能代公園辺りに松が少々見えるのみで、「住吉の松原」でも住吉（八幡）神社周辺は松に囲まれているが、あとはわずかである。今から200年前、能代の街はまだまだ開発がなされていなかったようである。

※菅江真澄の絵は「能代市史・特別編・自然」をご覧下さい。

3、栗田定之丞の登場

栗田定之丞が郡方砂留吟味役として出戸、長崎方面の砂留め、植林に取りかかったのは1798年（寛政10）のことであった。賀藤景林の来能より25年早い。郡方とは郡部担当のこと、町部担当の賀藤景林・景琴とは身分差があったのだろうか。仕事上の体験交流はあったものだろうか。

いずれにせよ担当区域ははっきり分かれていたのだ。

1940年（昭和15）能代港町、柳村が合併し、能代市となるまでは、境界線の南、大内田、出戸、長崎も隣村だった。このへんの事情が合併後に生まれている私には分かりづらいものがある。

栗田定之丞が編み出したとされる「塞向法」^{さいこうほう}（私は長い間「寒向法」だと思っていた。『塞』の方が正しいようだ）は、簡単に言えば「秋から冬にかけてを工事期間とし、古わらじをつないだ物や、萱、藁を束にして一部を砂に埋めて風を防ぎ、柳が根付いてから、翌秋に根元を土で丸めたグミを植え、さらに次の年に松の苗を植える」方法であった。松が根付くまで4、5年がかりの作業で、1反歩に松苗3千本となっている。

4、賀藤景林父子の頃

賀藤景林が能代木山方兼務となって、本庁と能代、半々の勤務となったのは1822年（文政5）のことであった。それまでの110年間、町人であれ役人であれ地元の人たちのみで奮闘を続け、基礎を築いてきたわけで、この基礎が受け継がれていったからこそ、景林、景琴時代の飛躍的な植林が可能になったと思われる。賀藤親子2代30年間で実に100万本を超えるクロマツ植林となっている。場所は「盤若野、後谷地、男鹿街道脇、キリンガ原」辺りとみられている。

1820年代から幕末にかけて、秋田藩からの有能な人材と豊富な資金の援助があつて、また、代々の越後屋、越前屋両家はじめ地元有力者、木山方役人、町人のいわば町ぐるみの協力体制があつてこそ続けられたのだと思われる。



栗田定之丞時代の松と推定樹齢200年（2010年調査）のクロマツ伐根。周囲217㍎、最大直径71㍎、場所は出戸小児童公園。1810年頃の植林と思われる

1850年、樽子山に「賀藤景林君之神霊」碑が建立されたのは、景林没後16年目のことであった。石碑はその後能代公園入り口付近に、さらに現景林神社後ろへと移動することになるのだが、碑文のなかに「―千余の民戸に薪材^{まき}を給す―」という箇所もあって、私は遅まきながら、植えられた樹木は松ばかりでなかったのだし、たき木の役割も果たしていたと知らされた。

実際1833年には天保の大飢饉^{ききん}があつて、藩による植林は16年間停止せざるを得なかったのだが、その間越後屋、越前屋両家は8千本に近い松ほかの成木を救済のため提供し、その跡地に自費で植林している。いくら成木後は一定の割合で両家のものになる約束であつたとはいえ、何代にもわたりこの事業を継続し得たということに、両家の志の高さ、子弟教育の確かさを感じる。

幕末、いつまで植林が行われたかを、賀藤景琴の木山方^{きやまかた}在勤年で推測すると、1850年代半ばと思われる。今、後谷地国有林老齢林部分には年輪210年くらいの何代目かの越後屋太郎右衛門時代の松が景林神社後側に、年輪160〜180年位の賀藤景林・景琴時代の松が大森神社より街側にそれぞれ少しずつ残っている。これは松くい虫被害木の年輪調査によっても明らかになっている。



賀藤景林時代の松。推定樹齢180年（2005年調査）のクロマツ伐根。周囲234㍎、最大直径78㍎、場所はサンウッドの向かい側。1825年頃の植林と思われる



越後屋太郎右衛門時代の松。推定樹齢203年（2005年調査）のクロマツ伐根。周囲218㍎、最大直径74㍎、場所は景林神社裏側。1802年頃の植林と思われる

明治、大正期（1868年～1925年）

1、官林（国有林）だけが残った

明治になって松原がどこにどれくらい広がっていたのか、能代浜がどんな状態だったのか、地図や絵を探してみたがいまだに納得できる資料に出合えないでいる。

1711年の砂留め開始以来160年を経て、かつて後谷地とひとくくりにされていた地は、開発が進み田畑が増えていることが、明治初期の地図に出ている。明治期、個人所有の松林は、どんどん切られ畑や果樹園、宅地に変わり、官林となっている所は次第に学校など公立の建物を建てるために伐採され、あるいは民間に払い下げられたりして消えていったと思われる。

1908年（明治41）の能代町の国有林は、樽子山砂防林が21^{ヘクタール}、後谷地砂防林が170^{ヘクタール}、となっている資料がある。

そのうち樽子山砂防林は、1922年（大正11）町立能代高等女学校（現県立能代北高校）、1926年（大正15）県立能代中学校（能代高校跡地に現中央公民館、文化会館）、1929年（昭和4）淳城尋常小学校（現淳南小）の新築等で消えていった。

一方後谷地国有林の方は、盤若野砂防林（盤若町周辺）と範囲がはっきりしないのだが、1916年（大正5）県立工業講習所（現能代工業高校）新築、同年、記念運動場（市営陸上競技場）造設、後には工業高校の増設・グラウンド整備、道路（市道萩の台線他）や萩の台墓地公園となったり、民間に払い下げとなって住宅地に変わった。

また、現能代公園は、もともとは砂山の連なりで、「清助町後砂留」の地として代々越後屋家に受け継がれてきた場所だったが、明治以来たびたび整備・拡張され、そのつど古松は切られていった。

現在の後谷地国有林は全体で301畝、そのうち老齡林部分は約70畝となっている。明治期、この老齡林によって街部への砂飛びは一応防げていたのか、官による能代浜植林があったのかどうかはつきりしない。

いずれ、大正末期の近代の砂防工事開始に伴い、砂地は所管を移し、かつての隣村に属する地域の買い上げ等があった、現在の301畝になったのだろう。

明治、大正期は国や県の体制が整うまで管理が手薄になったようで、更新が遅れ砂丘が荒れてしまった。1918年～1924年（大正7～13年）林縁部に「4分の1皆伐」というやり方で更新をはかった。この時の伐採した面積は6・5畝、本数4954本、材積にして7510石（約2102立方メートル）であった。1921年（大正10）から始まった造林事業と重なることになる。

1918年（大正7）後谷地国有林が能代港町委託林となったことはどう影響したのだろうか。その頃すでに能代浜は荒れ始めていたと思われる。この年、「請願調査制度」が、1928年（昭和3）には能代営林署に「林野順守」が配置されたところなので、ようやく県でも海岸部に気を配るようになったのだろう。それまでは県の林政は主に秋田杉の管理の方に目が向いていたようだ。

「砂留」200年後に残った松林区域(推定)
(1910年頃—明治末期・能代港町—)



2、下浜に育った父の記憶

1907年（明治40）下浜生まれの亡き父から聞いた話では、「大正の初め、砂防林らしきものはなかった。大森稻荷神社の周りや下浜に昔の人が植えた松がいくらか残っていた。海岸線は今よりずっと遠かった。大森より海側は砂丘が連なっていて、草、グミ、ハマナス、ハマボウフウ、柳、松の種からの松（実生の松）が生えていた。イシゴオカさんという牛乳屋の牛を浜に放していた。——大森神社の所は独立した山であつたが、冬の間は雪の上に砂がたまり、春になると砂の下に雪が見えた。大正の初め頃だつたと思うが、この大森あたりの大きい松が砂に埋まり枯れてきた——。この神社の山に夏に雪を掘りに行ったことを記憶している人は多い。

大正末期（1920年頃）には下浜地区で飛砂のため引越しする家が出てきた。

3、能代の浜はなぜ荒れた？

明治期から大正期にかけての50～60年の間、能代浜は次第に荒れていった。荒れた原因は何だつたのだろう。これについてのまとまつた研究はされていないように見受けられる。あいまいにしておくといつかまた繰り返すことにならないだろうか。私が資料から拾つた範囲では、

・ハマナスの根の乱掘り——根の皮を染料や痔の薬に

・雑草、灌木かんぼくの乱採——燃料、飼料、肥料、製塩に

・牛、馬の放し飼い——草の芽を食べ枯らしてしまう

などが挙げられている。たつたこれだけのことで、と最初は半信半疑だつたのだが、砂地を覆っている草や低木こそが砂飛びを抑えているのであつて、砂がむきだしになつてしまふとたちまち



飛砂で埋まつた大森稻荷神社鳥居＝1923年（大正12）
（秋田市の長岐喜代治氏より）

に風に舞い上げられ、残っている砂草を覆いつくし枯らし、徐々に遠くへ飛び被害を大きくしていくのだと納得するようになった。

大正15年生まれの人からは、「学校でハマボウフウ、ハマエンドウなどは採るなど固く言われた」と聞いていたが、一般には砂草の大切さが徹底していなかったのだろう。砂の飛ぶ範囲は広がり続け、やがては大森神社西側の秋田藩時代に植えた松を枯らし、なぎ倒すようになり、神社の鳥居も倒されてしまった。

1920年（大正9）、専門家による視察現場での講演、警告を受け、町長、町議会は直ちに各方面に陳情開始、砂防・植栽を要請した。

翌1921年（大正10）秋、林野庁は後谷地国有林造林事業に着手することになった。砂防地域の面積は160^{ヘクタール}に及んだ。これが近代の能代海岸砂防林造成の始まりとなった。



砂防施設（砂丘）造り始まる＝1923年（大正12）。後方に藩制時代からの松林が見える（後谷地国有林）



荒れる砂丘＝1929年（昭和4）（後谷地国有林。長岐喜代治氏より）

近代の植林の始まり

1、富樫兼治郎さんの活躍

後谷地国有林の担当は秋田藩時代の能代木山方の流れをくむ能代小林区署、後の能代営林署である。当時の署長は吉成貞助さんであった。現場の指揮は、1921年（大正10）東京帝国大学農学部林学実科を卒業したばかりの富樫兼治郎さんに任された。

富樫兼治郎さんは1896年（明治29）山形県鶴岡町の生まれ、能代に来た時は25歳の若さであった。大学を卒業したばかりで現場のことは全く分からない。能代小林区署としても海岸砂防造林というのは幕末以来の仕事だったろうから経験者もないし、過去の記録も無かったと思われる。

富樫さんは、荒れ放題の砂地や藩制時代からの砂防林の前に、何から手を付ければ良いか途方に暮れる日々であったが、多くの視察者の意見を聞き、古い記録を読み、波・砂・砂丘・風・海岸植物等の観測・調査に没頭した。

部下であった鈴木重孝さんは生前次のように語っていた。

「富樫さんは海岸砂防は全く初めて、右も左も分からないところから始めたので、何から手をつければよいかわからず苦しみました。テントをかぶって2日も3日も海岸に泊まって、1日の風の動きを観測したり、砂草を調べるため北は深浦から南は男鹿まで歩いたりした。あんまり熱中してノイローゼになって2カ月ほど休養したこともありました。ある時、奥さんが浜に出てハマボウフウを2、3本採って帰り、夕食の料理に使ったところ大変な怒りようで『我々が心血注いで1本でも草を多くしようと頑張っているものを抜いてくるとは何事



初めて植えたニセアカシア（後谷地国有林）。1924年（大正13）秋に植える。除伐の上クロマツを植える（1931年（昭和6）撮影、「日本海北部沿岸地方における砂防造林」より）



いったん飛砂で埋められ枯死したクロマツ林は、砂をさらに内部に移動させる。枯れた林が再び現れたところ＝1929年（昭和4）（「日本海北部沿岸地方における砂防造林」より）

だ！早く行って元のところへ戻してこい！」と叱ったそうです。富樫さんの一番大きな仕事は、どういうふうに砂を鎮めるか、地形図の上に砂丘を造り、砂丘の間隔・高さをどのくらいにするかの研究を重ね、基本を作ったことです」

15年くらい前には富樫さんのことを記憶している人が、健在であった。作業員であったSさん（男）は、「実直な人で、あの人はど仕事熱心な人はいなかった。つられて人夫も頑張ったものです。私はこの浜で本当に松が育つのだろうかと、半信半疑で仕事したものだ。富樫さんだって果たして実現するかどうか夢みたいなのであったかもしれないが、そういう気配は全く見せないで、『必ず将来立派な林になるから頑張ってくれ』って一生懸命励ましていた。富樫さんの仕事は玄人の仕事、先の見通しあつての仕事であつた。――誠心誠意、心を込めてやらねばならない仕事であることを教え、いいかげんな仕事は許さない厳しさがあつた――」と語っている。

富樫さんが能代時代を回想した一節に、「――大正十二年の春に初めて黒松の砂防植栽をやつた。苗木は本荘小林区署から貰^{もら}つた二回床替えの三年生苗であつた。之が私の総領息子^{これ}なのだから念には念を入れて成^なる可^べく安定した安全と思はれる所を選んで真心こめて植えたのである。然^{しか}るに夏季になつたらあれ程熱心になつて植えたのに殆^{ほとん}ど全滅の有様である。――」最初は失敗続きだったのだ。

大正13年度（1924）から昭和3年度（1928）までの5年間に植えたクロマツが7万5550本、このうち枯れたりして補植した本数が昭和4年度（1929）までに7万4120本、実に98%に及んでいる。富樫氏が苦心の末にあみだした「1年生造林」「埋め藁工^{わら}」「衝立工^{ついたて}」は実質昭和3年度から施工され、この植栽法により水分の不足による枯れ損が飛躍的に少なくなり、これ



7年後同じ場所で（1936年（昭和11）3月撮影、「日本海北部沿岸地方における砂防造林」より）



1928年（昭和3）4月に初めて埋め藁工、衝立工が行われる。クロマツ1年生造林。（1929年（昭和4）撮影、「日本海北部沿岸地方における砂防造林」より）

らの工法は秋田営林局管内のみならず近辺民間事業にも模範となって広まった。

富樫さんの能代勤務は1924年（大正13）12月までの4年間であった。転任後もたびたび能代に通い研究を重ね、その成果は本荘、鶴岡、酒田等の海岸砂防現場での研究と合わせて1冊の本にまとめられた。1937年（昭和12）に発行された「日本海北部沿岸地方における砂防造林」（財団法人・林曹会）である。この本の中には大正末期から昭和10年頃までの後谷地国有林の様子が多くの写真とともに出てくる。研究書なので私には難しい部分がほとんどだが、指導者であり学者でもあった若き富樫さんの研究の第一歩が能代浜であったこと、熱心な仕事ぶりが随所に感じられ、この本に出合った感動で私は一冊200ページ、ほとんどをコピーしてしまった。鈴木重孝さんの話では「めったに手に入らない貴重な本で、最初から最後まですべて手写する人もいた」ということだ。

2、大事業を支えた人たち

戦前の能代浜の作業には、私の住んでいる鰯渕からも多くの青年男女が通っていた。皆さんのお話を聞いたことは幸運であった。鰯渕からは後谷地国有林の入り口まで片道約7・5キロある。往復当然歩きである。Mさん（女・大正5年生まれ）は、「私は数えの14歳（昭和4年）頃から、元東中グラウンドあたりにあった営林署の苗圃（ひょうほ）で働くようになり、17歳頃からは主に海岸の植林作業に出るようになった。仕事は1年中あって、雨の日も風の日も鰯渕の自宅から通った。作業の始まるのは朝は7時、途中昼休みが1時間あって、終わるのは夕方5時だった。朝5時

黒松新植対補植歩合調査表
(能代市後谷地国有林)

植付年度	新 植 本 数		補 植 本 数		前年度までの 新植累計に対 する補植歩合 %	備 考
	当年度	累 計	当年度	累 計		
大正 13	20,440	20,440	—	—	—	埋藁の施工を始む
同 14	34,650	55,090	13,130	13,130	6.4	
同 15	12,460	67,550	7,090	20,220	3.7	
昭和 2	—	67,550	22,000	42,220	6.3	
同 3	8,000	75,550	—	42,220	—	
同 4	59,700	135,250	31,900	74,120	9.8	
同 5	190,000	325,250	5,000	79,000	5.8	
同 6	138,000	510,250	—	79,000	—	
同 7	47,000	602,080	20,000	99,120	1.9	
同 8	91,830	602,080	—	99,120	—	
同 9	107,600	709,680	9,400	103,520	1.8	
同 10	148,800	858,480	23,500	132,020	1.9	

1928年度（昭和3）埋め藁工施工の成果はつきりと（「日本海北部沿岸地方における砂防造林」より）

に家を出、帰ると6、7時、冬場は暗いうちに出、暗くなってから帰ったものです。作業の内容は春は植え付け、夏は草刈り、冬は砂止めの簾張りすだれなどが主なものだった。――日当は昭和10年頃で男が1日65〜70銭、女が35〜40銭だった。――常時100〜150人くらい働いていた。鹹測かんそくの人が多かったが、田床内、向能代、落合、鳥形とか町の人(旧市内)もかなりいた。――植林の順序はまず砂丘になっている所は崩してならず。砂は2人1組、モッコで運ぶが、前の方は体力の無い人は担げなかった。ならした所に萱かやで編んだ簾を敷いて砂を落ち着かせる。1、2年して砂が落ち着いて、雑草が生えるようになってから今度は松を植える。松は苗圃で2、3年くらいになったものを馬車で運んだ。――植える順序は、バケツに水を入れ、根を入れておく。植え穴は深さ20センチくらい、幅30センチくらいに掘り、底に三つ折りにした藁わらを敷いて足で踏んでから砂を少し置き、松苗を植え、掘り上げてある砂を戻し、根元を足で踏み平らにならす。風よけは秋になってから麦からを折って30センチくらいの高さになるようにして海側に立てる。夏は周りの雑草を刈って輪にし、苗木の根元に置き日よけにした。植え付ける時も、その後も水は一切かけなかったが、その割に枯れ死はなかった。日陰の無い夏の草刈り作業、雪よりも砂が吹いてきて隣の人も見えない冬の日もありました。でも天気の良い春は気持ち良かったですよ」

植え方、衝立つたてのやり方は場所によって多少違っていたようです。

私が話を聞いた人たちはどの人も、誠実そのものの、記憶力もすばらしく、若い日に能代浜で働いたことを一様に「面白かった」「楽しかった」と振り返り、誇りに思っているようでした。浜の作業には誰でも採用されるわけではなく、若く勤勉で優秀な働き者だけが選ばれていたのだ。

近代の能代浜砂防造林の成功を素人なりに考える時、いろんな要因がうまくか



クロマツ苗を見守る人たち。初期の頃と思われる。営林署の人たち(?)の祈りのつぶやきが聞こえるようだ



松の種をじかにまく(後谷地国有林)。1929年(昭和4)1畝当たり25* $\square$ の種をまいた地域。(1931年(昭和6)7月撮影、「日本海北部沿岸地方における砂防造林」より)

みあったという気がする。一に地元行政の素早い反応と国の支援、地元営林署の優れた指導者を先頭にした並々ならぬ取り組み、それらの熱意に応えた地元農村部の若くて働き者の男女作業員たち、どこが欠けていても成し得なかった大事業であったと思う。

昭和の始まりから戦争の始まる昭和16年頃までの後谷地国有林クロマツ植林は、約131畝に及んでいる。

戦争の始まる前の植林でつけ加えておきたいことは、1927年（昭和2）生まれの人たちが、尋常小学校5年生のころに学校で「愛林日」に植林に行った、という記憶。子どもでも大丈夫な場所で体験させていたのである。



砂に埋まったクロマツの苗。このあと苗はどうなったのだろうか

戦時中の砂防林（1941年～1945年）

1、戦時中も植林はあった

太平洋戦争が始まったのは1941年（昭和16）12月。戦争中の約4年間、後谷地国有林はどんな様子だったのか。営林署の資料によると植林は戦時中の昭和18、19年度で約27畝となっていたので、全く手付かずだったわけではない。

戦時中の植林を記憶している人の話では、「昭和18、19年頃、青年学校で能代浜へ植林の勤労奉仕に行ったことがある。営林署員の指導で小さい苗を、『ひとくわ植え』といって埋めワラも使わないで植える簡単なやり方だった。海岸線からかなり街側の区域だったから、あんな植え方でも根付いたのでしょうか。着物にゲタやぞうり姿の母さん方も大勢いた」

このあと出てくるが、戦時中に起きた山火事の跡地に子どもたちが植林している。戦時中の植林はボランティア頼みだったのだろうか。

植林は昭和19年度まで続けられ、その後3年間の空白があって戦後の昭和23年度に再開されている。

鈴木重孝さんは著書「能代市砂防林の歴史」（昭和62年発行）の中で、戦争中の様子を、「――海岸砂防工事のような戦争に関係しないものは一切予算は認められず、放置の状態に置かれた。そのため海岸砂防林の生命線である前砂丘は破壊され、それより風列を起こして飛砂は扇の如く^{こと}広がり、容赦なく林内に吹きつけ林縁は堆砂^{たいさがき}垣の作用し、材木はどしどし埋没枯死せしめこの作用がどんどん内陸に進入し、戦時の5カ年間砂防林の破壊された面積約60畝に及び、往時の飛砂激甚の様相



飛砂の害おそるべし（戦後）。戦時中もこんな被害があったという

を呈するに至った」と記している。

被害面積については、どの程度を被害と見るかにより数字が違ってくる。能代営林署「国有林治山台帳」によると「戦時中既往造林地32・28畝後退した」とあるのでこちらの数字をとりたい。大正末期から昭和16年まで20年間の努力の結晶131畝が、たった4、5年の空白で32畝の被害である。国は戦争一色、営林署も人手が足りず監視が行き届かなかったのだろう。同時に市民の生活は食糧確保等目前の生活で精いっぱい、燃料にするため松葉さらいに林に入ることとはあっても、飛砂の被害までは関心なかったのだろう。

2、地元の人しか知らない山火事

被害といえば戦時中の1943年（昭和18）、大きな山火事があった。1枚の写真も無く、発生日もまちまちだが、ここでは「消防年報・平成11年版」による「昭和18年8月29日、午前9時4分、7、8年生松16町歩焼失」説をとりたい。

場所は大森稲荷神社より海側へ250^{メートル}ほど下った辺りから、現在の防火線2号（ジヨギンゲコースでもある）を挟んで、下浜集落近くまでの広範囲であった。

消火の水も無く、延焼を防ぐためには周辺の松を切り倒すしかない山火事であった。火事の原因も分かっている。戦時中ということで地元の新聞も休刊中、ニュースにもならず、写真一枚残っていない。ここに20年に及ぶ植林の苦労は水の泡となった。

1930年（昭和5）年生まれのおさん（男）は清助町に昭和30年まで暮らしていたが、「昭和18年の山火事は大変なことでした。子どもながらも仲間3人で米代川よりバケツに水を汲み、小松原に行ったことを思い出します。この火事の後始末が大変でした。鋸、鉋のこぎり、鉋なたを持って、焼け残った木を切り、第一小学校のグラウンドまで縄をかけて引つ張って運んだり、勉強の方は全然し

ませんでした。また、「愛林日」に焼け跡に1年生の苗を植林しました。穴を30センチの深さに掘り、下にワラを敷く。その上に砂をかぶせて、松の根を四方に広げ、砂をかけ、よく踏みかためる。その松の苗の前にスタレを立て、風から苗を守る、という植林の方法でした。私たちはこのあとバケツで水をかけたりしました。終戦後、復員して来た時に一番先にこの松を見るに行った次第です。大変良く成長しておりました。その後、木材工業団地ができ、道路も立派になったようですが、私たちの植林した松は道路になったりして失われていました。残念です」Oさんは育った家が松林の近くだったので、松林はとても身近なものだった。「私の小さい頃は松葉をコマジャリ（竹の熊手）でかき集め、固めて1メートルくらいの高さに積み上げ縄でしばり、家まで運び、それでかまどで飯を炊いたり、湯を沸かしたり、貴重な燃料でもありました。運び役はもっぱら私でした。松かさはツボミで運び、日に当てると大きくふくらむ。第一中学校の辺りは草はほとんど生えておらず、きれいな砂山の松林でした」と記している。

3、枯れ松ばかりでなかった「松根油」作り

私はこれまで「松根油^{しょうこんあぶ}」作りに利用されたのは、枯れた老松ばかりと思って、松自体は惜しくないものと思い込んでいた。ところが能代公園の近くに住むNさんの話では「戦争末期に家のそばの松の木がほとんど切り倒され、その根っこを掘り出した。大きな穴が無残にもあちこちに散在し、公園の西側の方は丸裸になっていた。ガソリンの代わりの『松根油』の原料にということで倒されてしまった」生きていたクロマツも切られていたのだ。Nさんのお宅の周りは1710年代の、いわゆる能代砂防林発祥の地で、Nさんは生まれた時から歴史あるクロマツの太木に囲まれて育ってきた。能代一中も能代工業高校グラウンドも能代公園も、そういう由緒ある松でいっぱいだった頃を知っている。「あの当時のクロマツがそのままだったら、見事な巨松の風景

が見られたらうに…」の思いが消えない。

「松根油作り」は戦時中ならではのことであつた。後谷地の街に近い老枯れ松は、町内会や各種団体の勤労奉仕の形で動員された人たちで、根っこが掘り上げられ、街の中数カ所に集められ、「松根油作り」に使われた。難儀して作られた「松根油」が役にたったという話は聞いたことがない。



戦時中の松根掘りの跡は今も。戦後の植林にかかわったHさんは「今も穴の跡がはっきりしているのは、砂が飛ばなくなった証拠」と話す

戦後の復旧にも困難が

1、くり返された復旧工事

戦後の復旧工事は1948年（昭和23）から始まった。この時の責任者は能代営林署経営課長の住友重久さんであった。あまりの荒れように住友さんもまた何から手を付ければよいか途方に暮れたという。

戦後の能代浜の作業に歩いた人たち数人からも話を聞いたが、仕事の内容は戦前とほぼ同じで、むしろ「割り当てや競争があったりで、決して楽ではなかった」、と言う。しかし、戦後の仕事は少なかつた時代、営林署の仕事は他に比べ条件が良かったので人気があった。若い男女の多い職場で活気もあり、昭和23年（1948）からの現場を知っているHさん（男）は、「当時海岸線の砂丘（戦前に造られた前砂丘、下浜から長崎まで約3・8^キ）のあちこちが破壊され、砂が入り込んで相当な面積の松が枯れていた。3〜4^歳に育った10年生ぐらいのものであった。復旧工事は私が入署した昭和23年頃から始まった。当時はまだ機械力は無く、すべての資材は人の背に担がれて運ばれた。着るものも履くものも、今のようには丈夫なもの無く、真冬も素手であった。当時の人は今の人はとてもまねできないくらい働いていた。あれほど汗を流し、苦勞しても、やめたい



整地作業。戦前は、もちろん、戦後もしばらく人力であった



ワラ静砂立工



ふくさ^す覆砂工。カヤ^す簀で砂面を覆う

という人もいなかったし、つらいとか大変だとかあまり感じなかったのは、骨折る以上に楽しさがあったからだと思う。作業員は男女とも20代が中心で、同じ年代の仲間がいるせいか皆楽しそうだった。昭和25、6年頃のマツクイムシ発生の際は弱った大きい松（老木）がやられた。まだ薬剤防除もない時代だから、虫が入っている間に皮をはいで焼却処分した。他にもエサ木（虫を集める）の調査、風倒木の処理、盗伐監視などいろんな仕事があった――」

2、自然のきびしさの中で、張り切って働いた日々

高校時代、（1953、4年）春休みにアルバイトで能代浜の現場で働いたというTさん（男）は、「――仕事は植林の際の標付け、防風垣造り、^{わら}藁運びなど。藁は事業所から浜の現場まで1往復2時間くらい（途中2回休憩）の所を、学生アルバイトは女2束、男3束背負い、午前2往復、午後3往復した。アルバイトは男12、3人、女の子も何人かいた。砂道なのでズックに砂が入るし歩きにくかった。一般の作業員は女の人が多く、20歳前後の結婚前の人が多かった。男の人も20代前半の人が多かった。常時雇と臨時雇の人がいて常時は14、5人くらい、4、5月の植え付けの時は臨時が100、120人にもなった」Tさんは後に正式に営林職員となった。「――今はああいう仕事はできるものでない。特



藁を運ぶ



しばを運ぶ



アキグミの種採り。アキグミの実を採り、潰して水で洗い種を取り出す。種から育てるやり方と挿木で育てる方法があった

に冬の仕事は厳しかったと思う。真冬に下ズボン3枚にズボン2枚はいた。なにしろ風が強くて風速5メートルで砂が転び（転がり）、10メートルになると飛んでくるので、それだけ厚着しないと痛いのだ――

戦後長く現場で働いた女性たちは、「初めの頃は何でも背負って運んだから、海に行く時は自分で使う縄を腰から離されないものであった。帰りに荷物があるとそれを使う。――風の強い時は簾^{すだれ}を背負っているとあおられ、横になって進んだ。道路が砂で原だから歩きにくい。前の人の歩いた足跡さカッポカッポ入れていくと歩きやすい――」雪のため松の枝が倒れ、直しに歩いた年もあったし、虫が大発生した年もあった。

グミの種採りに土崎に1週間も泊まりがけで行ったこともあった。昭和30年くらいの冬に土手（人工砂丘）を造るため、下浜のはずれから砂を運んだが（この時はあゆみ板の上をリヤカーに砂を積んで）、せっかく運んだ砂が一晩で波にさらわれたことがしょっちゅうあった。普段でも土手（人工砂丘）の崩れるのがひどかった――

3、林の中にも近代化の波が

戦時中の山火事の実験から、戦後林内に監視やぐら（火の見やぐら）や防火水槽、防火帯が造られていった。子どものころ、私たちが林の中で遊んでいるとどこからともなく営林署の人がやってきて、何かと注意されたものだ。望遠鏡でやぐらの上から見ているのだろう。その後いつの間にかやぐらも防火水槽も無くなっていった。事故があったり



防浪垣を造るためのかけや打ち



防浪垣補修のための砂運び（昭和36年1月、後谷地）



防火水槽が造られる（昭和39年9月）

して管理が難しかったようだ。

能代浜に機械が入るようになったのは、1960年（昭和35）頃からであった。

1961年（昭和36）林内に4本の道路が完成し、1963年（昭和38）には海岸沿いに幹線道路が造られた。これは砂防林前線砂丘の頂が道路になったもので波打ち際から150^{メートル}、南北3・2^{キロ}、幅3・6^{メートル}、

工費160万円、土砂は向能代から運んだ。北側50^{メートル}は能代市が道路を造り結んだ。

防火線もあちこちに造られ、特に防火線2号は昔「大砂丘」と呼ばれていた所で、戦後間もなく手を加え幅を広げたが、土を入れたのはブルドーザー等の機械が出回ってきた昭和30年代後半で、林内で一番長く幅広く（幅10^{メートル}）消防車が入れるようになっていた。私の一番好きな道で、20代の頃までは海側の松も低く、海の見える場所ですと休みしたものだ。

後谷地国有林301^号のうち戦後に植林したのは、約61^{ヘクタール}であった。1948年（昭和23）から始まり1965年頃（昭和40）はほぼ終わった。道路ができ、資材の運搬が楽になった頃終わったことになるが、その後も間伐、除伐をはじめとするさまざまな手入れは今も続いている。

4、親から子へ伝えるべき大切なもの

明治・大正期の被害、戦時中の被害を思う時、国の一大事（明治維新、戦争）があったとは



▲戦時中の山火事に懲りて監視やぐら（火の見やぐら）が造られる（大森稻荷神社後方）



▶防火線2号の曲がり。大砂丘の破れた所が曲がったまま道路となった

いえ、被害に輪をかけたのが私たち近辺に住む者の無関心、無知という意識の低さであつた気がしてならない。知らないで、あるいは知つていながら、皆がやっているからと、砂浜の植物を採ったり掘ったり、キノコ採りで松の根を傷付けたり、枝を折ったり、人の目を盗んで入つてはいけない区域での松葉さらい、はてはごみを捨てたりの悪さのあれこれ。大人の意識が低いと当然子どもも真似をする。

かくいう私もまた、1950年代、幼かつたとはいえハマエンドウの実を採ったり、キノコ採りに熱中して、やみくもに小松原と呼ばれていた幼松の中をくぐり抜けたりしたことがあつた。家や学校で松林のことで何か言われた記憶がない。しかし、同じ年代の友は、母親に「浜の草や実は採つてはいけない」と言われていたという。

今なおごみ捨てがあとを絶たないように、教育（学校ばかりでなく、行政、家庭での）の徹底はむずかしい課題だが、子どもが学校へ通う前の小さいうちにこそ、実際に松原へ連れて行き、林の中にいる感覚を肌で感じさせるとともに、やってはいけないいろいろな約束をきっちり教え込む努力は、いつの時代にも必要だ。山火事防止のための火の用心、ごみを捨てない、などその最たるものだ。

国有林は国のもの、「風の松原」の管理は行政がやってくれて当たり前の感覚は今も根強いものがある。しかし、国や県は、いつでも面倒見てくれるとは限らないことを何度か経験している。そんな時、地元住民はどうしたらいいのか、松原とのつきあひ方を普段からしっかり持つて暮らしていくことが大事である。国や県からの預かりものを利用するからには、図書館や体育館など公共の施設を使う時と同じように、約束事をきっちり守らねばならない。その上で自分たちではどうしようもない部分を、これまたきっちり要求すべきと思うのだ。



砂丘を越えて砂浜への橋。橋の材料は二セアカシア、海はもう目の前



幾重にも守られて

1、砂防林切る、切らぬ

が実施されたことがまず挙げられる。

今のうちに記録しておいてほしいものだ。

●近代火力発電所

臨海木材工業団地

防火水路用

水面貯木場

戦後(昭和23年~)植林区

防火線2号

④

源流敷

●木材高度加工研究所

●近代山本広域交流センター

戦前(昭和3~19年)植林区

鳳凰伝

③

②

①

老齢林区

五尊稲荷神社

下酒

▲五輪町

景林神社

サンワッド近代

越後屋太郎右衛門の墓

鉢山

長力谷

●①老齢林区

●②戦前(1928年~1944年~昭和3~19)植林区

●③戦後(1948年~1965年~昭和23~40)植林区

●④1976年(昭和51)100m中伐採地



— 31 —

2、能代市による整備進む

その後1980年（昭和55）後谷地国有林は251㍍が保健保安林に指定され、一部が能代市に貸し出されることになり、市による散策路、ジョギングコース設定等の整備が始まった。1982年（昭和57）には散策広場整備、1987年（昭和62）に「能代海岸砂防林整備計画」が作られ、いこいの広場の整備が始まった。この年には「能代海岸砂防林フェスティバル」が開催され、「風の松原」の名称も決まった。その後もフィールドアスレチック、木造トイレ、案内板設置、下草刈り、サイクリングコース設定、水辺の里等の整備が続いており、文字通り市民の「いこいの場」として利用されるようになっていく。

埋め立てられた海岸には、臨海木材工業団地、能代火力発電所ができ、今、砂浜は河戸川の方まで行かないと見られない。

能代の海岸砂防林は後谷地国有林の部分に関しては、砂防の役割から別の役割へ大きく変わってきていることを実感する。

3、日本海中部大地震発生

1983年（昭和58）5月26日正午発生の日本海中部大地震では、能代港も大変な被害を受け、多くの犠牲者を出した。後谷地国有林内での被害はほとんどなかったようだが、向能代落合地区の大開浜国有林や、近辺の民有砂防林は大きな被害を受けた。

大開浜では、高さ3㍍の防浪砂丘が10カ所以上も破れ、40㍍ほどが海水をかぶり、もつとも海岸寄りの幼齢林は改植しなければならなかった。



津波により破られた砂丘。日本海中部地震により被害を受ける（大開浜国有林）

大開浜国有林の復旧工事は3年計画で行われ、クロマツの改植14・4鈴をはじめ前砂丘の復旧、防風柵等、復旧費用は実に4億1千万円に及んでいる。この費用の数字は今砂防造林の工事があつた場合の目安になるのでないかと思われる。

大正末期に能代に来て、後世に残る海岸砂防の道を切り拓いた富樫兼治郎さんは常に「海岸砂防は今必要で設けるばかりでない。これから何十年後、何百年後の津波などの天災を防ぐために遠大なる計画のもとに造っているのだ」と言っていたという。砂防林は富樫さんの予言通り立派に防潮林の役目をも果たし、避難する人たちを助け、周辺施設への被害を最小限に食い止めたのであった。

この時能代周辺の沿岸で、砂防林は津波の勢いをやわらげることが立証された。

4、松くい虫被害北上

マツクイムシといってもいろいろ種類があつて、戦後、後谷地国有林でも大発生した虫と今問題になっている虫とは違う。今のはマツノマダラカミキリがマツノザイセンチュウという病原体を運ぶことによつて増えていく病気だ。

1982年（昭和57）秋田県では象潟町で一番早く発生した松くい虫被害は北上を続け、いづれ能代にも、と予想されていた。1999年（平成11）ついに後谷地国有林でも発生。2002、3年頃をピークに被害は減ってきてはいるが、依然油断はならない。発生から10年間（平成10～20年度）の被害は国有林（後谷地、大開浜）だけでも約8千立方メートルに及んでいる。

能代の場合、県南の被害の教訓から、防除帯を設けたり、空中散布をやったり、個人の家の被害木処理を手助けしたり、早くから国・県・市の行政が足並みそろえて対策をとってきたので、被害がこれくらいで済んでいるのではないだろうか。



ピーク時の松くい虫被害木処理
（2003年5月防火水路帯そば）

5、最近の変化

ごく最近の後谷地国有林の変化といえば、チップ舗装の歩道ができたりして、松原が健康増進、やすらぎをもたらす林としての見直しが強まったことを感じる。

平成16～19年度（2004～2007）、4年間にわたる「生活環境保全林整備事業」により、ウッドチップ舗装遊歩道、休憩所、あずまや、標識等の設置、林内整備（本数調整伐、つる切り等）が、約2億3千万円の費用をかけて実施された。

新しい道は「健康づくりのみち」として好評で散策者は増える一方だ。

ここまです後谷地の変化をたどり、欠けているのが何か、分かっている。それは松原の林相の変化である。場所によっては広葉樹やニセアカシアが増え過ぎているように見受けられ気になる。これが今一番大事な事なのかもしれないが、めったに松原に行けなくなった私には、今現在の状態を正確に伝えることができないので、今回はこれらの変化には触れない。

松原をめぐる数々の課題は、行政、専門家、住民を交えた討論の場で、それも時間をかけ、手間ひまかけて現地を調査し、方向を見出し出してほしいと思う。国や県の森林に対する方針は時代により変わっていくだろうが、この地で暮らす私たちにとって砂防林は絶対欠かせない「生きている公共施設」でもあるのだから、筋の通った長期の地元の方針を持ち、それを行政も住民も共有すべきだとも思うのだ。

『心』を伝える

松原のために、今私にできることは何か。300年を振り返ってみて、私が感じたこと、それは飛ぶ砂を抑え、松を植えるために心血を注いだ人たちの



新しい道に古松を生かす。平成16年度（2004）から4年間、後谷地国有林内は大幅に整備された

『心』をくみとり、それを伝えることではないか、との思いに行き着いた。

私が、実際に松を植えたり、砂防事業に携わった本人から聞いたのは20人そこそこだったが、忘れられない言葉が多く、感動の連続であった。私がひとり占めするにはあまりにももったいない。

営林署を退職してからも松原を見回っては成長の遅い木には「頑張っておがれや」と声を掛けていたというHさんは去年亡くなられた。工業団地造成で、最初200m幅で切られると聞いて、毎日「いだしなあ、あんたにホネ折ったじ、ホネいだし」と嘆いていたというMさんは今どうしておられるだろう。生涯を能代の砂防林に捧げたといえる鈴木重孝さんが撮られたたくさんの写真と遺稿、伝えられるべきことは数々ある。

砂留め、植林に関わった昔の人たちも、きつとこのようなすばらしい言葉を発し、わが子を育てるように慈しんでいたに違いない。

1本1本に込められた『心』を忘れない。これが私の「—ふるさと学習—能代砂防林の300年」の成果であり結論である。

最後にこの学びをまとめるにあたり、米代西部森林管理署（旧能代営林署時代を含む）の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございます。

また、文中間違い等あるかもしれませんが、ご指摘いただければうれしいです。民有林部分まで調査が及ばなかったことが心残りですが、私の松原の学びもこの辺でひと区切りつける時がきたようです。

お話を聞かせてくださった皆様、資料を提供くださった皆様、長い間応援くださった皆様に心から感謝申し上げます。

（2011年5月記）



ジョギングコース34番地点（平成18年9月28日）（「風の松原に守られる人々の会」2007年作成リーフレットより）

あとがき ― 冊子発行にあたって ―

私が能代の自然環境、特に砂防林をもっと意識して暮らさねば、と思うようになったのは40代半ばになってからのことです。

1986年～1988年の3年間、友人たちが「野添ゼミ」という、いろんな分野の方々を講師に呼んでの勉強会を開いてくれた。そのなかで「子どもの成長と森林」に参加した時、小さい頃から慣れ親しんだ能代浜や松林がしきりと思ひ出され、それは思ひ出というより私自身に染み付いたものになっているのを感じ、これって一生の財産なんだと気づいたのでした。育った環境がその人を創る、と言われるが、幼児期、青年期の自然環境もまた人間を創る、とこの時はつきり分かった気がする。

その後、父が亡くなった時、自分と父を繋ぐものが松林であったことに気づいたり、私の住んでいる鹹渕地区が、大正末期からの近代松原の造成に深く関わっていた事を知るにつけ、松原のことをもっと知りたいと思うようになった。市の図書館へ行ったり、近所の当時の事を知ってる人を訪ねたりして、遅まきながら素人の学びが始まった。

休み休みの作業ながら、短文がまとまると他の人にも読んでもらいたくて、地元紙「北羽新報」やサークル誌「秋田のこだま」に投稿、1999年にはそれらを「私たちの風の松原物語―語りつく能代海岸砂防林の近代―」として40ページの冊子にまとめた。

今回の「―私のふるさと学習―能代砂防林の300年」は2011年5月25日から9月9日まで17回にわたり「北羽新報」に連載されたものです。当初は冊子にまとめる予定はなかったのだが、掲載途中で数人の方から声をかけられ、教材のひとつになるかもしれない、このような形になった。「砂留」300年の節目の年にふるさと砂防林の歴史を私なりにまとめたという目標を達成でき、ホッとしている。

又、冊子作成にあたり省略したのだが、連載が決まった時、本文の最初に書かずにはいられなかったのは、3月11日の東日本大震災のことであった。三陸の地震・津波、福島原発事故、あまりの悲惨さに打ちのめされ、動揺の日々が続いた。あんな津波が来たら「風の松原」だってひとたまりもないだろう、防潮林として過度の期待はすべきでないのか？海や川、山に近い能代の街と三陸の街が重なり、これまでもさまざまな災害を経験した街としても他人事でない今回の災害であった。

あのような大きな津波を防ぐ施設などありえない、と今は思う。そして砂であれ風であれ、いつまでも松原が防いでくれると当てにしているはいけない、松原自体が刻々と変化しているのだから、もっと真剣に変化に目を向けないと手遅れになるのではないかと心配だ。

子どもたちが大きくなって能代から離れても、ふるさとの自然環境で鍛えた身体と精神を一生の財産に出来るように、又能代に残った人やよそから来た人が、この街で心身健康で過ごせるように、そのためには松原は大切に次の世代に引き継ぎたい。引き継ぐことができるかどうかは、今現在能代に住む私たちが他人任せにせず、意識してそのことに対処するかどうかにかかっている。東日本大震災と能代砂防林300年の歴史はそのことを教えてくれた。

今回「北羽新報」連載にあたり社の皆様に、冊子作成にあたっては「秋田のこだま」編集部及び北羽新報社印刷事業部の皆様にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

2011年10月

浅野ミヤ

米代西部森林管理署より提供受けた写真

- 【8 ページ】 ① ② ヨシ簀堆砂垣 ③ 芝堆砂垣
- 【16 ページ】 ④ 砂防施設造り始まる
- 【20 ページ】 ⑤ クロマツ苗を見守る人たち
- 【21 ページ】 ⑥ 砂に埋まったクロマツ苗
- 【22 ページ】 ⑦ 飛砂の害おそるべし
- 【26 ページ】 ⑧ 整地作業 ⑨ ワラ静砂立工 ⑩ 覆砂工
- 【27 ページ】 ⑪ 藁を運ぶ ⑫ しばを運ぶ ⑬ アキグミの種採り
- 【28 ページ】 ⑭ 防浪垣・かけや打ち ⑮ 防浪垣補修・砂運び ⑯ 防火水槽
- 【29 ページ】 ⑰ 監視やぐら
- 【30 ページ】 ⑱ 幾重にも守られて ⑲ 砂浜への橋
- 【31 ページ】 ⑳ いこいの広場は苗畑
- 【32 ページ】 ㉑ 津波により破られた砂丘
- 〔目次〕 埋めわら工の順序4枚

参考資料

- ・「秋田縣海岸砂防造林史」秋田縣林務課 昭和8年
- ・「日本海北部沿岸地方における砂防造林」富樫兼治郎 財団法人林曹会 昭和12年再刊・昭和39年
- ・「大正昭和林業逸史 上巻」林業經濟研究所編 昭和46年
- ・「能代市砂防林の歴史」鈴木重孝 昭和62年
- ・「能代市史 特別編 自然」能代市史編さん委員会 平成12年

- ・「能代市史資料 第15号 越後屋・村井文書」能代市史編集委員会 昭和60年
- ・「秋田県の地名」平凡社 1980年
- ・講義「越後屋・越前屋、そして定之丞・景林―砂防林に尽くした人々―」古内龍夫
2001・6・23
- ・「能代のあゆみ」年表」北羽新報社 昭和60年
- ・「風に学んで―能代海岸防災林の造成の記録―」東北森林管理局・米代西部森林管理署
平成13年
- ・「私たちの風の松原物語―語りつぐ能代海岸砂防林の近代―」浅野ミヤ 1999年
- ・「日本の海岸林」村井宏ほか編 1992年
- ・「秋田営林局百年のあゆみ」秋田営林局 昭和61年
- ・「『風の松原』美林化ビジョンは?―市民の読書ノートから―」梅田市美 平成20年
- ・リーフレット「能代海岸砂防林 風の松原」風の松原に守られる人々の会 平成22年
- ・「秋田の砂防林 緑の遺産」その1・その2 宮崎一彦取材・編集
- ・財団法人秋田県緑化推進委員会 秋田県林務部、森林土木課 1999年
- ・「日本五代松原 風の松原フィールドガイド」山本農林事務所林務課
- ・「出戸の春」佐藤忠三編 平成2年

浅 野 ミ ヤ

- 1944年 能代市西通町（旧、本町）に生まれる。
- 現住所 〒016-0121 能代市鰺渕字鰺渕60番地
☎・FAX 0185-58-2360
- 「秋田のこだま」サークル・読書サークル「茱萸（ぐみ）」
「風の松原に守られる人々の会」・「山脈の会」所属

「秋田のこだま」叢書 — 5 —

—— 私のふるさと学習 ——

能代砂防林の300年

発行 2011年10月25日
〒016-0121 能代市鰺渕一本柳176-4
畠山正治方「秋田のこだま」編集部
☎0185-58-4969

非売品

-
- 表紙写真「昭和30年代後半・能代浜・男鹿寒風山を望む」、
裏表紙写真「昭和30年代後半・能代浜・白神山地を望む」
（秋田市・長岐喜代治氏撮影）
 - 印刷・製本 北羽新報社 印刷事業部

